冬届く、

れら

携帯のバイブがテーブルを振動させる音が耳に痛い。ちらりと視線を上げ、壁掛け時計で時間を確認する。現在の時刻は零時を少し廻ったところ。

読み止しの本を開いたまま、白緑色（びゃくろく）をしたカーテンの掛かった窓を見る。陽の差し込んでいる様子はない。無視したまま再び本の世界に入り込もうとする。

しかし、厭な音は鳴り止む気配をみせない。どうやらメールではないようだ。小さな溜息をひとつついて私を悩ます音の根源に手を伸ばす。着信画面には私のよく知る友人の名前が浮かんでいた。いや、そもそもこんな迷惑極まりない時間に電話を掛けてくる相手などそうそういない。

「ゆき、ゆきだよ、ゆきっ」

はいと私が出る前に歓声のような声が響いてきた。挨拶も抜きにして、電話の向こうにいる相手はゆきゆきと連呼している。

「ねぇ、聞いてる？　すごいよ、雪降ってるよ」

すぐにゆきが雪に結びつかなかった。雪が降っているという台詞でようやく雪だと理解した。確か彼女の出身地はあまり雪が降らないらしい、ということを思い出した。珍しいものを見て、深夜であるにも関わらず子供のようにはしゃいでいる彼女の姿が眼に浮かんでくる。

「雪かぁ」

私は小さな声で呟いた。白緑色のカーテンを少し開けて外を見る。彼女のはしゃいでいる原因が暗い世界の中でひときわ白く、存在を主張するようにゆっくりと音もなく舞っていた。

「雪が降ってるのに、なんでそんなに楽しくなさそうなの？　せっかくこんな時間なのに電話してあげたんだよ」

携帯越しに私の機嫌を読み取ったらしい。少し頬を膨らませた彼女の姿が目に浮かび、非常識な時間だからと非難する気も失せた。彼女はすぐに人の機嫌を読み取る。だからといって機嫌をとるわけではなく、そのことを指摘する。普通なら指摘されると余計に厭な気分が増すはずなのに、彼女にされるとばかばかしく思えてしまうから不思議なものだ。彼女の明るく人懐っこい性格のせいなのかもしれない。けれど、苦笑しただけで彼女を許してしまうのは悔しい気がした。

「だって雪ってそんなに珍しくないし、通学のときとか大変だからね。君みたいにはしゃいでばかりは、いられないんだよ、お嬢ちゃん」

「うぅ、お嬢ちゃんじゃないし。そっ、それに雪博士

が言ってたでしょ、雪は空からの……」
「空からの？」
「うぅ、あーもうおやすみ」
彼女からの電話は一方的に切れた。どうやら思い出せなかったらしい。次に会ったときはからかい過ぎたと謝っておくべきかな。でも彼女はきっと忘れているような気がする。
私は白緑色のカーテンの隙間からもう一度紫黒色（しこく）の世界を覗いた。眉間に皺を寄せた私の向こう側で、徐々に私の世界から音と温度を奪っていく白き華が静かに静かに舞っていた。

講義がないというのに私は大学へと足を運ばなければならない、というのはとても愚かしいことのような気がする。レポートの提出日は明日。たぶん明日から始めても終わると思う。つまり、私がしていることは今すぐにはしなくてもよいこと。すぐにしなくてもよいことなのに後回しのできない私。そんな自分が余計に愚かしく思える。できることはその日のうちにやっておく、これは意外と損な性分なのかもしれない。このレポートのために、明け方まで本を読んでいた。結局読み終わらなかったけれど。寝不足で頭がぼぉっとする。
いってきます、と誰もいない部屋に挨拶をして家を出た。
目の前に広がる景色には色がなかった。いや、それは正確な表現ではない。色はあった、ただいつも私が目にしている景色の色ではない。隣家の瓦の蘇芳（すおう）や紺青、近所のアパートの外壁の鳶（とび）色や樺茶色。庭先の松葉色、地面の薄墨色。そんないつもの色は全て白き衣に包まれて、ひっそりと身を潜めていた。
深夜に降っていた雪は止んでいる。けれど見渡す空には灰白色の厚い厚い雲が残っていた。
雪か、雪にはいい思い出なんてない。いや、そもそも私が住んでいた地域だって毎年雪が降っていたわけじゃない。だから、雪の思い出だって中学生のときくらいまでしかないけれど。

私の住んでいた地域ではたくさんの雪は降らなかった。でも全く降らないわけではなくて。降るには降る。積もっても七センチくらいのものが。雪合戦をやろうものなら雪玉に混ざった不純物のせいで怪我をする。白き世界は子供たちの足でぐちょぐちょにされて褐色を含み、怪我をした子供の血で紅き色を取り込む。雪だるまを作ろうとしてもすぐに砂利や土が混じって白い雪だるまになんかならない。或る年には、かなりの

雪が降って大きい雪だるまを作ろうとした。最初は小さな雪玉を何度も転がして大きな雪の玉にしていく。自分の体躯など考えずに、少しでも大きく、少しでもきれいな玉になるように。大きくはなった。ちょうど頭のサイズと胴体のサイズになるような大きさに。でも、どちらもとてもでこぼこしていた。玉というのもはばかられるくらいに。ただそれでも胴体の大きな雪玉の方がいくらかましな形にはなっていた。結局雪玉を大きくしすぎて子供の力では重ねることができずに雪だるまにはならなかったけれど。

それに、多少の雪でも交通機関はすぐに麻痺してしまう。自転車でスピードを出せば、スリップして電信柱にぶつかり空を舞ってしまう。電車は遅れたり止まってしまったり。車もスピードを出せずに渋滞。どんなに私が急いでいても私たちの足は止まってしまう。目の前の白き華は物も云わず、静かに静かに舞い続ける。

まるで私の焦りが全て無駄だと、空回りだと、そういうかのように。まるで私の苦しみが永遠に続くことを予感させるかのように。雪に、いい思い出なんてない。

数年ぶりに見た雪のせいで、ずいぶんと感傷に浸ってしまった。

「――さんですね」

少し上ずったボーイソプラノ。声のした方に顔を向けると、一人の少年が立っている。白き世界の正式な住人のように見えた。白い帽子、膝丈までの白いコート。帽子から覗く髪はキャメルの色をしている。

今私の近くにいるのは目の前の少年だけ。でも、私には目の前に立っている少年が声を発したようには思えなかった。コートから覗いている顔や首、足が驚くほど白くまるで人形のそれのように透き通っていたのだ。誰もが羨む絹のように白き肌に妙に整いすぎている顔立ち、加えて体躯の細さが私に物云わぬ人形を連想させたからだ。白き世界の中の白き住人。唯一鮮やかに色を放つ彼の紅き唇が動いた。

「あなたに郵便があります」

白い肌とは対照的な紅い唇から漏れた声は、先ほど聞いた少し上ずったボーイソプラノだった。少年はいつのまにか私との距離をつめて、白い手紙を差し出してきた。近づいてわかったのだが、少年は白い斜め掛けの鞄を持っている。少年の体躯にしては幾分大きすぎる鞄だ。しかし、コートの白と同化していて見えにくくなっている。

少年が差し出した手紙も目の前の景色や少年同様に白い。きっとこの手紙も白き世界のものなのだろう。恐る恐る受け取りながら、私はふと不審に思った。こ

の手紙はいったい誰が私に。
　彼は右手の人差し指をゆっくりと空に向けた。少年の瞳が淡くキャメルに輝き、少年の鮮やかな紅き唇が微笑んだようだった。
　私は少年の指に導かれるように空を見上げた。
　灰白色の厚く重たき雲が夢だったかのように消えていた。見渡す空は、白いキャンバスを空色の絵の具で染めたように明るい色をしている。
「あなたの大切な方からです」
　澄み渡る世界の中に響いてきたのは、少し上ずったボーイソプラノ。けれど、その声は雪が陽に照らされて溶けるようにだんだんと小さく消えていった。
　私が空から地へと視線を戻したとき、少年の姿はすでになかった。帰ってしまったのかと階段の方に足を急かす。しかし、階段の下にも彼の姿は見えない。いや、それどころか少年が来た跡さえなかった。階段にも二階のポーチにも。あるのは私の足跡だけ。
　全てが夢だったのだろうか。
　けれど私の手には少年から受け取った手紙が残っている。宛名は私の名前。ただどこにも差出人の名前はない。
　手紙の封を切った。

『おねいちゃん』

　懐かしい声が聞こえてきた。おねえちゃんではなく、おねいちゃんと呼ぶ幼い声。でも、太陽のように明るく私を照らす響き。
　封筒の中には雪が一片（ひとひら）入っていた。
　雪は手で触るとすぐに融けてしまうし、花のように多くの形や色もない。ただただ冷たく、同じものが延々と繰り返すように降るだけだと思っていた。しかし、雪は冬が私たちに贈ってくれる純白の花なのだと聞いた気がする。今まではそんな考え方を信じる気になんてならなかった。私にとっての雪は暗く冷たく哀しいものでしかなかったから。でも、今私の手の中にあるものは花なんだと思う。重々しく色を失った白き塊ではなく、やさしく煌いた白色をした雪の一片、冬の華。
　雪合戦のときに他人の流した血に大声を上げて泣いていたのは。大きな雪だるまを作ろうとして、球よりも直方体に近い形の雪玉を作ったのは。雪玉を重ねようとする私を手伝ってくれたのは。自転車も電車も車も使えなかった日に、私はどうしてあんなに焦っていたのだろう。
　幼く愛しい私の太陽。たくさんけんかをしたけれど、常に他人の痛みに敏感な妹を尊敬していた。あのとき、指先が悴んで真っ赤になるまで二人で大きな雪だるまを作ろうとした。あのとき、早く少しでも早く急熱で

茹だっていた妹を病院に連れて行こうと父や母が必死になっていた。あのとき、入院していて体調が悪くなった妹を見舞うために父の車の助手席に乗っていた。いつもいつも、妹のことを考える私の目の前では静かに静かに白き華が舞っていたのだ。気持ちばかりが焦る私には腹立たしくて仕方がなかった。

『冬って、お花咲かないでしょ。でもね、その代わりに雪が降るんだって。だからね、それを冬の華っていうんだけど。冬の華ってね、おねいちゃんみたいなんだよ。だってね、あったかくてやさしいもん』

私に一生懸命冬の華の説明をしていた妹。私の大好きな妹は、私の嫌いな雪、いや冬の華と私が似ているといった。両方とも暖かくて優しいからだって。白く冷たき雪を暖かいといった。優しい太陽が私に遺した暖かな言葉。

大学の学習室。朝早いせいか私以外誰もいない。
手にしていた白い手紙を明け方まで読んでいたレポート用の本とともに机の上においた。椅子に掛けて栞を挟んでいたページを開く。明け方になっても読みきれなかった最終章。
最終章の冒頭を目にして、知らず知らずのうちに緊張していた頬の筋肉が緩んでいくのを感じた。
耳の奥で白き世界の少年の声が響いた気がする。
最終章の冒頭の言葉は――。

『雪は空からの手紙である』